

モデル事業名	カシミヤ号のふるさとづくり
活動団体名	伊関カシミヤ協議会
ホームページ	http:// (活動団体のHPのアドレス)
所属/ 担当者名	伊関カシミヤ協議会/副会長 長野 広美
連絡先	電話：0997-28-0240 Eメール：hiromin8282@yahoo.co.jp
活動地域	鹿児島県西之表市(ニシノオモテシ)伊関校区(イセキコウク)

### ● 活動地域の概要

#### ■伊関校区(種子島の北東部に位置する)

人口486人、世帯数223、60才以上人口割合49.4%、65才以上人口割合44.2%

#### ○構成集落(5集落)

- ・柳原(人口139人、世帯数62、60才以上人口割合61.2%、65才以上人口割合56.1%)
- ・又延(人口9人、世帯数4、60才以上人口割合33.3%、65才以上人口割合33.3%)
- ・浜脇(人口115人、世帯数49、60才以上人口割合34.8%、65才以上人口割合32.2%)
- ・伊関本村(人口47人、世帯数22、60才以上人口割合61.7%、65才以上人口割合51.1%)
- ・沖ヶ浜田(人口176人、世帯数86、60才以上人口割合47.2%、65才以上人口割合41.5%)

■コーホート法による将来人口予測でも、老年人口の増及び生産年齢人口の著しい減が見込まれ、人口減及び高齢化に対する改善の兆候がみられない。

■農林水産業中心で、さとうきびや甘藷が基幹作物であるが、高齢化の進行に伴い、農地の遊休化が進んでいる。

■明治18年難破したアメリカ商船カシミヤ号を救助した歴史を持ち、地域住民の誇りとして受け継がれている。

#### ■位置図



■保育園跡



■広大な農地と海岸線

### ● 活動地域の課題

・平成14年度に市立保育園が閉園、21年度には学校区の中学校が閉校となり、通園・通学の不便はもちろんのこと、今後ますますの人口減少が懸念される。

・高齢化の進行に伴い、地域役員のなり手不足、集落費・校区費の負担増、環境美化活動の衰退が顕著な課題となってきた。

### ● 活動の内容

#### ・平成21年度

##### ■活動①：みんなで見つけよう宝さがし事業

海や広大な農地など豊かな自然環境に恵まれる校区の埋もれた資源について、再度見直す機会を持つ。また、課題を把握の上、将来像を明確にし、地域資源をいかした今後の活動方を地域民で共有する。実施するにあたり、NPO法人・行政・外部の専門家の意見を取り入れる。インターネットの環境整備を図り、HPを開設の上、広く情報発信を行い、主に出郷者に郷土を懐かしく思ってもらう活動から始める。

##### ■活動②：もったいない規格外品活用事業

味は劣らないのに商品価値が見出されない農産物の規格外品について、活用方を検討し、小規模でも健康づくりやお小遣い稼ぎのための農業が展開できる環境を整備し、高齢者にいきいきと生活してもらう。有名になりつつある安納いもの原産地に隣接する立地条件を活かし、安納いもの加工品やサトウキビの加工品などの開発や、出郷者団体との連携及びインターネットを活用した流通・販売体制の整備を図る。

##### ■活動③：保育園が地育園へ 跡地活用事業

閉園となり活用されていない保育園を地元住民の交流の拠点として蘇らせる。主に、行政や地元女性団体との連

携により、高齢者の健康づくりの拠点利用を軸に、規格外品の直売市場や小学生の放課後寺子屋などその活用策を検討し、交流の拠点施設として活用していく。

## ● 活動の成果

### ・平成21年度

#### ■活動①：みんなで見つけよう宝さがし事業

文教大学准教授、海津ゆりえ氏を招き、ワークショップを開催。地域住民が地域資源を十分に理解し、共有、再認識するプロセスの大切さを学ぶとともに、豊富な資源を再認識し、地域に対する誇りを持つことができた。自発的に協議会の推進組織である運営委員会が発足するなど、活動に対する理解が広がりつつある。



#### ■活動②：拠点整備と直売所の開始

廃園となった保育園跡を地域民で清掃し、地元材を活用の上、直売所を設置した。地元小学生への公募により直売所名称を「村咲市場」とし、10月には1回目の直売会を実施。農産物の規格外品や家庭菜園で獲れた野菜などを持ち寄り、2ヶ月に1回ペースの開催を行っている。これまで、埃にまみれていた跡地を自ら整備したことにより、直売所だけでなく、地域の子どもや高齢者の憩いの場としての活用も行われつつある。



#### ■活動③：パソコン教室の開催

地元小学校の協力を得て、パソコンを活用した地域の情報発信を行っていくため、地元住民を対象に週に一度、パソコン教室を開催している。チラシ作成の方法を学びながら、HP開設による情報発信を目指しながら学習中。

## ● 今後の課題及び展望

### ・課題

- 農作業等、日頃の仕事の合間をぬっての会合や行事の遂行であることから、役員以外の参加が得にくい状況がある。
- 拠点施設として整備した保育園跡について、直売所としての機能は発揮したが、高齢者をはじめとする地域民の具体的な活用策が、まだ、不透明な状況である。

### ・展望

- これまでの住民自治組織は保守的な雰囲気が強く、新しい情報を取り入れたり、新しい事業を試みることに強い抵抗があった。今回の協議会の設置によって、その地元自治組織（校区議会）の承認を得て、これまでの現状に対する危機感や新たなことへの挑戦意欲を持つ個人が中心となって運営委員会が構成されたことで、新しい事業展開がしやすくなるとともに住民の関心も広がりつつある光明もある。今後、運営委員会の、各委員の人材育成や、事業実施に向けての組織力強化を図っていくことで、大きな成果が期待される。
- 自らの力には限界があることから、様々な団体等との連携を模索していく。今年度は、特に、出郷者との連携を模索するため、多くの出郷者が集う会合に出席の上、取り組みの説明や協力依頼を行う。さらに、情報発信分野で当初予定から遅れが出ていることから、早急に体制や手法について検討、構築していく。
- 地域資源の活用については、伝統的な手作り黒糖や冬場に生産させる早期園芸作物、果樹類などその特長を効果的に活用した販売力の強化を模索していく。
- 拠点施設の有効活用策について、再度、検討し、特に、高齢者が安心して楽しく暮らせる環境づくりに役立つ活用策を高齢者の方と一緒にしながら検討していく。
- 今回の事業を実施するに当たり構築できた行政やNPO法人との連携をもとに、地域役員のなり手不足、集落費・校区費の負担増、環境美化活動の衰退などの課題の解決に向けた取り組みを推進していく。